令和８年度第１回　社会教育委員の会議　議事録

日　時：令和8年6月22日（月）13：30～
場　所：生涯学習総合センター研修室５・６
出席者：委員8名、事務局5名

１　委嘱状交付

２　会議

（1）開会

（2）委員紹介

（3）議事（主な意見）

〇会津若松市第８次総合計画について

【計画全体に対する質問・意見】

・基本目標のまちづくりのコンセプトの「ひと」「くらし」「しごと」「市民参画・協働」「持続可能性」は全部並列関係になっているのか、それとも階層関係になっているのか。

・第７次総合計画では政策が全部で 42 あったが、第８次総合計画では 19 になるということで、複数の課が 1 つの政策に対して協力して政策を推進していくことになると思うが、すり合わせはしているのか。

・第７次総合計画は策定から 10 年経過するが、その評価やチェックをしっかりとした上で、第８次総合計画の策定に臨んでいるのか。

【政策 03　地域によるこども育成と若者支援の強化に対する質問・意見】

・「子ども基本法」が施行され、学校の中だけではなく、地域コミュニティや広いコミュニティの中で子どもの意見表明や社会参画を確保しなければならないが、そのような機会を確保するために、「若者の社会参画」というワードや視点を入れていくべきである。

・今は中途採用が 50%を超えるようになり、どんどん社会に出て転職をしながらリスキリングし、新たな資質や能力を身につけながら仕事を変えて生きていく時代になっている。色々なテクノロジーが出てきて AI 等も発達してくる中で、働くことに関しての形の変化も意識して、政策を考えていく必要がある。

・挑戦の先には成功がなくてはいけないと思う子どもたちが多いようだが、失敗できる機会をたくさん作ってあげたら良いと思う。そういう言葉の変換をするだけでも挑戦しやすくなっていく。安心して失敗できるような地域になったらまた戻ってきやすくなるのではないか。

・女性向けサービスが充実すればするほど女性だけがそれを引き受け、これからも頑張れ、いっぱい応援するからと言われている気がする。女性を応援してくれるのはとても嬉しいが、同じくらい男性を応援してくれると凄く結婚に対して良いイメージを持ってくる。

・関東では、子どもたちが最大３か月程度転校することなく学校を変えられるという、ローカルを体験できる仕組みがあるが、逆にローカルの子どもたちが関東の学校を体験できるようにするため、区域外就学制度をもっと使っていけたら良い。

・会津若松市は子ども・若者の定義として特定の年齢に区切っているのか。

・子育ての負担を軽くすることが、人口減少を食い止める策にもなるのではないか。少しずつでもアンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）を無くすような取り組みをしていかないと、男性と女性が本当に一緒になって子育てをする状況が来ない。

【政策 04　生涯学習と文化・スポーツ振興に対する質問・意見】

・現状と課題で文化施設について「市民がさらに能動的に参加できる機会の創出が求められています」とあるが、施策の主な取り組みにはそれがあまり見えてこない。第７次では、「文化施設等の利活用の推進と適切な管理」と表現してあるが、第８次では、「文化施設の適切な維持管理」としか記載していないので、第７次と同じように「利活用の推進」というのも記載した方が良い。

・文化・スポーツ、あるいは会津の特色である歴史に関して、これらの施設が充実していないというのは、生きがいとか、生活する上での魅力的な場所になり得ないということにつながってしまう。

・文化・歴史に関しては、後継者が先細りの状況があるので、小さな子どもたちにどのように魅力を知らせていくのかということも課題である。

・生涯学習施設が、何かしら若者の自己表現ができる場にすれば良いのではないかと思う。青少年の育成、あるいは若者の地元定着に向けたところと文化・スポーツ振興をどのような兼ね合いで行政は捉えているのか。振興計画でどうクロスをさせていく構想があるのか。

・仮に新しい施策をする際に、子ども・若者に関しては申請主義をとらない柔軟なやり方もあるのではないか。

・今、国もお金も自治体もお金が無いが、どれが一番大事かということに優先順位をつけ、特に子どもたちのためのことは優先順位の上の方に持って行って、どう整備していくかを考えるべきである。

【政策 15　市民協働の推進・地域コミュニティの維持・発展に対する質問・意見】

・これから日本の少子化が進む中で、あらゆる世代や、立場や背景が違う方々、海外の方々を、会津若松市でもいろんな市民活動や商業活動に参画していただくということは非常に大事である。市民協働の推進・地域コミュニティ、あるいは商業の発展、文化も含め、海外の方々を取り込んで、会津若松に定住してもらうということも考えていかなくてはならないのではないか。

・実際に養成講座をやっているが、さまざま募集をしても、なかなかボランティアが集まらない現状があり、それを具体的にどうしたらいいかということを考えなくてはならない。

・今の足許の立ち位置ではなく、もう少し先を見据えた５年、10 年先が大切であり、もっと敷居を低くして、外国の人たちや外国の子どもに会津若松をもっと好きになってもらって、住んでみようかなと思ってもらえるのではないか。

・全体的に何か問題がある人とか対象に対して、それをパッチ的に政策をあてていくというようなエイド型の支援が多い。主体的に子どもたち、あるいは若者とか全世代ができるような機会を作っていくようなイメージが良い。

(4) その他

(5) 閉会